(1) 縄文人の知恵

約1万2千年前から紀元前300年頃までの約1万年間を縄文時代と呼びます。その間、気候の温暖化が海面上昇、小型の動物の増加をもたらし、人々による狩猟方法も変化しました。

福島県沿岸には、当時の生活を物語る貝塚が多数分布し、そこからさまざまな生物の遺物が発見されました。文化展示コーナーで紹介しているいわき市大畑貝塚からは、アサリ、アワビ等の貝類、マダイ等の沿岸の魚、サメ、カツオのような外洋の魚、そして岸近くに入り込んだと思われるクジラの骨も発見されています。また、多くのイノシシやシカの骨を加工した骨角器(こっかくき)やさまざまな土器も発見されていることから、沿岸では、U字型の釣針や網を使った漁、そして貝の採集が行われ、砂浜においては塩を製造していたと考えられています。

また、丸木舟を使い、離頭銛(りとうもり)と結合釣針によって外洋のカツオやサメ、マグロのような大型の魚も捕獲していたと思われます。縄文時代につくられたさまざまな漁具の形式は、ほぼ、現在のものと変わりがなく、素材が骨か金属かの違いだけともいわれています。

▲いわき市大畑貝塚の断面

(2) 近世漁業の知恵

現在、小名浜港を中心とする福島県南部の漁港ではサケ・マスの遠洋漁業や遠洋から近海にかけてのサンマ棒受網、沿岸の底曳網、小型漁船による漁などが行われています。また、中、北部海岸においてはサケ定置網、底曳網、刺し網などの沿岸漁業が主体となっています。

もともと、福島県では地形的に大きな漁港が発達せず、江戸時代まで、主に沿岸の村々では伝馬船と呼ばれる1～2人乗りの船での漁が行われていました。江戸時代中期から幕末にかけて、イワシの地引き網等の網漁、鰹の一本釣漁も普及し、その漁業技術の知恵は、現代漁業の基礎にもなっています。また、イワシは干鰯(ほしか)などに加工され、綿花等、畑作の肥料となり、江戸時代の農業の発展にも大きく貢献しました。

▲地引き網風景（昭和初期）